

アプリカ (Applica Incorporated)

<http://www.applicainc.com/>

ストレージの仮想化機能などをフル活用し データ環境の拡張性確保と集中管理を実現

流行の台所用具からフライパン、トースターまで、消費者を魅了する多くの家庭用小型電気製品を販売しているアプリカ。現在に至るまで、同社には企業買収によって成長してきたという経緯がある。そのため、アプリカのデータセンターには運用管理においてさまざまな課題が浮き上がりつつあった。この現在の課題に加え、今後も企業買収をしていく可能性があることから、アプリカでは将来的にも対応可能な高い柔軟性と拡張性を持つIT環境を必要としていた。

台所・家庭用器具に イノベーションと品質が凝縮

アプリカがデザインし販売している製品は、Black & DeckerやSpaceMaker、LitterMaid、George Foremanなどの人気ブランドとして量販店やデパート、専門小売店で取り扱われている。その同社の製品分野である台所・家庭用器具は、全世界で数十億ドルの市場規模を誇る。

そうした中でも、アプリカが幅広く取りそろえる台所・家庭用器具にはイノベーションと品質が凝縮されており、日常の家事という単純作業から解放してくれるという独自の世界観は、多くの利用者からの支持を得ている。

データを統合するための ソリューションを模索

アプリカは、企業買収によってビジネスを安定成長させてきた。そうした経緯

から、同社には種々雑多のITシステムが稼働している。そのためアプリカは、同社が保有するデータを適切に統合するためのソリューションを探していた。

また、アプリカは近年、製品の生産を自社生産からアジア企業へのアウトソーシングに切り替えた。製品の販売は主に欧米諸国の企業であり、生産はアジア、事業拠点は世界中に展開しているため、アプリカではITシステムを24時間365日休みなく利用できるようにする必要もあった。

アプリカのIT部門が管理するデータ量は約10TBバイト。その範囲は財務やデータベース、ERP (Enterprise Resource Planning) などの基盤となるアプリケーションから、技術資料やデータウェアハウス・システム、高度なサプライチェーンの処理に至るまでのあらゆる分野におよぶ。ところが、それらのデータは関係部門しかアクセスできない、いわゆる「サイロ」の中に長年かけて蓄積されて

きたため、運用管理コストがかさみ、バックアップやサポートもままならない状況にあった。

アプリカのシニア・データベース管理者であるマイケル・フェアクロー氏は、アプリケーションの可用性や管理のしやすさを改善するために、次のような対応を考えていた。

「ストレージ環境の見直しは、1つの重要なポイントと考えました。どのようなシステムが追加されようとも受け入れられ、その時点でのビジネスの要件にも対応できる、そのような柔軟性と拡張性を備えたプラットフォームが欲しかったからです」

データが分散していることで バックアップの作業が困難に

アプリカのIT環境では、さまざまなシステムやサーバ、プラットフォームが混在しており、加えて小規模のSAN

仮に明日、新たに企業を買収したとします。
たとえ私どもとは異なる一連のシステムを使用していたとしても、
USP Vに簡単に仮想化することができます

アプリカ シニア・データベース管理者
マイケル・フェアクロー氏



(Storage Area Network)がデータベース管理システムやファイル・サービス、社内ポータル用サーバで使われている。

また、アプリカはストレージのコロケーション・サービスも利用している。ここでは、本番環境のコピーや開発用データなどを置くことがあり、その影響でバックアップ作業が規定の所要時間内に収まらず、システムの処理が遅くなることに一部のユーザーから苦情が出ていたとフェアクロー氏は明かす。

「データが分散しているとバックアップが難しく、多くの時間を要します。管理も簡単ではありません。バックアップ時間を短縮できれば、ユーザーへの影響も抑えられます。ですから、ストレージ環境を集中管理できる仕組みが欲しかったのです。仮想化技術や、ストレージを階層(Tier)単位で段階的に利用できる仕組みも、コスト削減とパフォーマンスの観点から最優先事項でした」(フェアクロー氏)

こうした要件に対し、複数のベンダーから提案が寄せられた。フェアクロー氏は次のように振り返る。

「さまざまなテクノロジーを比較・検討しました。基準となる指標も確認し、SANについても個別に見直しました。そしてすべての要件を満たしていたのが、日立データシステムズのソリューションでした。拡張性や柔軟性に優れたストレージ基盤と豊富な知識を持つ熱心なパートナーとして、すべての面で協力してくれました」

ストレージ環境を統合し 将来の拡張性も確保

アプリカが採用を決めたのは、エンタープライズディスクアレイ「Hitachi Universal Storage Platform V」(以下、USP V)であった。USP Vをベースにすることにより、ストレージ仮想化技術や論理パーティショニング、ユニバーサル・レプリケーション*などが実現でき、それらすべてを1つのインターフェースで管理できるためだ。

アプリカの主要なシステムは、USP Vに移行された。そこにはERPやデータウェアハウス、財務予測ツールなども含まれている。この成功により、フェアクロー氏は「企業買収によって将来的に拡張性が求められても、管理面とコスト面でしっかり対応できるように、私たちはストレージのリソースを論理的に分割する機能のHitachi Virtual Partition Managerも活用しようと考えています」と将来について語っている。

なお、今後の第2フェーズとして、アプリカではミッドレンジディスクアレイ「Hitachi Adaptable Modular Storage」(以下、AMS)の導入を予定している。AMSはUSP Vと同じSANを基盤として稼働し、社内の電子メールやファイル・サービス、サーバのVMware®クラスタを一時的に退避させる機能を提供することになる。フェアクロー氏は「比較的重要度の低いシステムはあまりコストをかけずに維持し、重要なアプリケーションを

つねに高いパフォーマンスで動作させるという管理ができるようになります」と説明している。

アプリケーションの 可用性向上と同じ効果に

フェアクロー氏は、USP Vについて次のように評価している。

「USP Vには多くの機能があり、コスト効率に優れ、高いパフォーマンスを発揮するだけでなく、オンラインバックアップやデータの重複回避などにより、バックアップの所要時間短縮も実現してくれます。これはビジネスから見れば、アプリケーションの可用性が高くなったことと同じ効果があるといえます」

USP Vを導入したことによって、アプリカのストレージ管理者は1名で対応できるようになった。しかも、SANに関する一般的な知識を持っていれば十分であり、USP Vの操作方法を知っていればあらゆることに対処できるようになったという。

「仮に明日、新たに企業を買収したとします。たとえ私どもとは異なる一連のシステムを使用していたとしても、USP Vに簡単に仮想化することができます」と、フェアクロー氏。そして次のように付け加える。「大変な作業を時間と予算どおりにこなし、問題もいっさい発生しませんでした。私たちが成功したのはベンダーの実行力のおかげでもあり、日立データシステムズを選んだことは本当に正解でした」

*ディスクドライブ上のジャーナル(変更履歴)ファイルを遠隔地の別のディスクドライブに転送する方式のリモートコピー機能